

した。

毎日のように、田を見まわりました。土の色を見たり、自分でなめてみて、味で土の種類をわけて記入しました。土の重さも、はかりではかっけてくらべたりしました。どんな土には、どんな種類がよく育つのかを、自分でためして書いておきました。

村の人たちは、与次右衛門が苗代なわしろに種をまけば自分もまき、畑に豆をまけば自分もまくように、何でも与次右衛門を手本とするようになりました。

春、農作業のうさぎょうが始まるころには、村の人が与次右衛門をたずねます。五左衛門ござえもんも、甚三郎じんざぶろうも、与兵衛よへいもいます。近くの作右衛門さくえもんもいます。

「与次右衛門さん、そろそろ種をまくころだけど、どんな種類の種をまいたらよいのかね。」

「作助さんのところの田は、家の近くで上田じやうでんだったね。それなら、どんな種